

# こらっせ便り

2022年2月28日



【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>

## 2年ぶりにキックオフミーティングを開催します！

### 福島子ども・こらっせ神奈川事務局

従来は福島っ子を神奈川に招くりフレッシュ・プログラムで賛同をお願いしていましたが、今年から「こらっせ」プログラム全体に賛同をいただけたらと思います。「こらっせ」のプログラムは、①「リフレッシュ・プログラム」、②「児童館応援プログラム」ですが、新たに③神奈川の子ども食堂などに集う子どもたちを山北に来てもらう「山北プロジェクト」の準備をスタート。①と②は今後も継続しますが、多少の内容変更を考えています。

### 賛同をよろしくお願いいたします！

事務局では3、4年前から「こらっせ」の方向性について議論を重ねてきました。3.11から時間が経過するにつれ世間の福島への関心も薄れ、子ども・若者は3.11の実体験や知識があまりありません。また、最近では原発問題と同様に重大な気候変動などの環境問題、貧困など子どもの人権問題もクローズアップされてきました。私たちは「フクシマを忘れない」、「子どもたちの未来のために」という結成時のミッションをあらためて想起し、「学び」をプログラムに組み込むことにしました。②のプログラムは福島の子どもの施設応援とともに原発事故について学ぶ「福島応援・スタディツアー」となります。③「山北プロジェクト」では、90%が森林で水源地でもある山北町で遊び、合わせて森林や水のことを学んでもらおうと企画し、コロナ禍でもできる準備を進めています。

コロナ禍で子どもたちと密に接するプログラムは中止に追い込まれましたが、立ち止まって考える時間もできました。福島っ子に向き合うことを通して子ども全体の人権を考えていこうと、昨年11月には加藤彰彦さんを迎えての講演会を開催。続いて、4月3日（日）のキックオフ・ミーティング（オンライン）・「原発事故から11年、自主避難家族の思うこと」では、いわきから東京・横浜に自主避難している鴨下一家（カルガモ一家）の11年間の体験と正義を求める活動についてお話してもらいます。

# オンライン講演会（講師：加藤彰彦さん） 「子どもたちの未来のために」を開催

新型コロナウイルス感染症の大流行のため、「こらっせ」は従来のプログラムを2年間実施できませんでした。このような時は原点にもどって子どもの人権を学ぼうと、講師に沖縄大学名誉教授の加藤彰彦さんを迎え、昨年11月21日にオンライン講演会を開催しました。テーマは「子どもたちの未来のために—沖縄・神奈川から」と設定しました。

加藤さんはペンネームを野本三吉といい、ご自身の体験に基づくたくさん本を書いています。大学卒業後4年間は小学校の教師を経験し、その後は全国の共同体を訪ね歩き、30歳で横浜市の職員になり、横浜市中区寿町で暮らす子どもたちの相談員、児童相談所のケースワーカーを経て、50歳からは横浜市立大学で教鞭をとり、61歳で沖縄大学に移り、沖縄大学学長を務めました。その後、お住いのある横浜市栄区に戻り、現在も子どもにかかわる様々な社会活動をされています。

## 「いのち」の大切さを強調

1時間ほどの講演では、生い立ちから現在にいたるまでの歩みに沿って、子どもとのかかわりについての体験が語られました。最初に、現代の資本主義社会を「いのちの時代」へと転換させるという理念の提示があり、「私的所有（独占、支配）」から「みんなのもの（共有、共存）」へ、「利用し利益をあげる」から「生かしあう（多文化共生）」へ、「捨てる」から「再生する」へと目指すべき方向が示されました。

加藤さんがお話のなかで強調されたのは、「いのち」の大切さ、生きることの意味でした。幼少期、1945年3月10日の東京大空襲で生後10カ月の妹を亡くすという悲惨な体験をしたこと、大学生のとき柔道の練習で頭を強打し、1カ月間生死の境をさまよったこと、母親を亡くして辛かったとき友人と心が通い合い救われたことなど、いくつかの原体験が紹介されました。

小学校教師時代の経験談では、皆から軽視されていた子が独創的な絵を描き、それを加藤さんが大いにほめたところ、皆のその子に対する見方が変わり、その子も自分に自信をもつようになったというエピソードを昨日のこのように語られたことが印象的でした。

また、「ねんど」と題する子どもの詩の紹介がありました。

人の心はねんどのようだ / いろいろかわる / ほっとかれたねんどはかたくなる /  
人の心とおなじじゃないか

ここには、子どもが育つには豊かな人間関係が必要だという加藤さんの思いが込められているようでした。

オンライン「こらっせ」講演会  
子どもたちの未来のために  
2021年11月21日(日)14時から16時  
「子どもたちの未来のために」— 沖縄・神奈川から  
お話：加藤彰彦さん(沖縄大学名誉教授)  
参加費：無料  
主催：福島子ども・こらっせ神奈川

「福島子ども・こらっせ神奈川」は、福島第一原発事故の被災「子どもたちの未来のために」行いたいという切迫した思いが背景で、2012年から福島県内の被災地の子どもたちを神奈川に迎え、山北君の自らの手で大学と一連に連なりオンラインプログラム。2014年からは大学生を対象に児童相談所に応じた交流プログラムを加えて実施してきました。コロナ禍によりこれらのプログラムは中断していますが、一方で子どもたちの未来のためにというミッションを若い世代と議論する機会が、加藤彰彦さんのお話を聞きたいという声があがりました。

加藤さん(ペンネーム：野本三吉)は「沖縄子どもと民間自衛隊」等多数の著作を書かれています。その経歴には驚かします。大学卒業後4年間の小学校教師を経験した後、全国の共同体を訪ね歩き、30歳で横浜市の職員として寿町で暮らす子どもたちの相談員、児童相談所のケースワーカーを経て、50歳からは横浜市立大学で教鞭をとり、61歳で沖縄大学教員、学長を兼任。現在は顧問に就かれ、老人会長として活躍されています。

沖縄では、市民、研究者、行政とともに沖縄の子どもの権利をテーマに研究会を開催し、調査を行い、市民と行政で子どもたちの問題をテーマにするという沖縄の機能が実現しました。この沖縄を元にした関心をもった調査にも参加されています。

子どもの人権をテーマとして、半世紀以上を現場で働き、研究し、発言し、記録してきた加藤さんから「子どもたちの未来のために」今、何が必要と考えられているのか、お話ししていただきます。

申込先  
Web会議システム(Zoom)より開催します。参加ご希望の方は、右側のQRコード  
各次のサイトよりご登録ください。入力が難しい場合は、事務局メールに必要事項(お名前、  
所属、メールアドレス)を送り込んで頂くようお願いいたします。講演会開催までに  
https://forms.gle/1KJlBalV5aMoC8nB

連絡先  
福島子ども・こらっせ神奈川  
E: info@korasse-kanagawa.org ☎ 045-353-9008  
ホームページ: http://korasse-kanagawa.org/

# 沖縄で「子ども貧困白書」を作成

## 福島子ども・こらっせ神奈川

子どもたちの  
未来のために



沖縄時代では、行政とともに子どもの貧困状態を調査し、「子ども貧困白書」を作成したこと、その結果貧困率 30%という厳しい現実が明らかになり、行政が本格的に対策に取り組む契機となったことが述べられました。沖縄の人たちからは、生きることの意味は次の社会を担う子どもを育てることだと学んだそうです。

また、東日本大震災で居場所を失くした子どもたちを沖縄へ招待するプログラムを企画し、子どもたちは民宿に分散して

宿泊することになりました。そのなかで、家族を失って落ち込んでいた子どもが、沖縄の人たちに暖かく迎えらるなかで元気を回復し、帰りの船の上から、「また来るよー」と大声で叫んだ感動的なシーンの紹介がありました。

お話の結びとして、これから「子どもの未来応援条例」をつくり、子どもを権利の主体として認め、行政・地域社会で協力して育てる、そのための支援体制、予算措置を目指すという構想が示されました。

## たくさんの感想が寄せられました

オンライン講演会の参加者は 60 名ほどでした。質疑応答では、様々な意見や質問が出され、加藤さんは一人ずつ丁寧に答えられ、とても有意義な時間をもつことができました。

講演会が終わってから、20 名近い方から心のこもった感想文が寄せられました。そこには、子どもたちへの熱い思いが伝わりました、何度も胸が熱くなりました、といった言葉が記されていました。

また、経済的指標だけではとらえ切れないところで子どもをとりまく環境は厳しくなっており、子どもの権利条約の精神を生かした取り組みが重要なこと、家族以外で子どもが安心できる場所・人が大事なこと、行政・地域社会と連携した居場所づくりが必要なことなど、加藤さんの思いに共鳴する意見が寄せられていました。

今回の講演会には、神奈川から遠く離れた土地に在住の人も何人か参加していました。オンライン講演会は、遠方にいる人も参加できる利点があります。今後もこのようなオンライン講演会が企画できればよいと思います。

☆講演の録画はこらっせのブログ <https://blog1.korasse-kanagawa.org/> の「オンライン講演会のご報告」で見ることができます。この QR コードからどうぞ。



# 山北の人たちと交流

## 陸前高田市の SET（元こらっせユース） 石渡博之さん

はじめまして、神奈川県横須賀市出身の石渡博之と申します。今回はこらっせ事務局の皆様にご案内していただいた「山北町」への訪問に関する報告をさせていただきます。

まず、私自身の簡単な自己紹介をします。大学卒業後、岩手県陸前高田市に移住し5年が経ちました。学生時代に関わりはじめた NPO 法人 SET に所属し、交流人口、関係人口の事業を行なっています。

こらっせの活動には大学1年、2年の時にユースメンバーとして関わらせていただきました。「被災地のために何かしたい」と思っていた時にこらっせの活動と出会い、素敵な子どもたち、運営の皆さんと出会いました。こらっせの子どもたちとの思い出がある山北町に再び訪れることができ、感慨深い気持ちです。2019年ころから訪問をしたいと思っておりましたが、新型コロナウイルスの影響で2年近く訪問ができない状況が続きました。状況が少し落ち着いてきたので、昨年11月18-19日について訪問することができました。



### 『地域住民と地域外の若者の交流』の可能性

2日間の滞在では私自身が現在行っている『地域住民と地域外の若者の交流』が地域にどんな新しい可能性を生み出すかという視点で様々な方からお話を伺うことができました。

18日は『丹沢湖記念館』や『箒沢荘』でお話を伺いました。地域に住む人から見た外から来る若者との交流の価値は山北町でもあることを感じるとともに、新型コロナウイルスの影響で観光で訪れる人も減ってしまい、活気がなくなっている現状も伺うことができました。

山北町の自然や景色を大切にしながらも地域づくりの視点で様々なアイデアや活用方法を考え、少しずつカタチにしている方々と出会えました。その後、『NPO 法人共和のもり』にお邪魔し、共和地区で行われている地域コミュニティでの暮らしや移住者としての暮らし、仕事のお話を伺いました。

19日は湯川町長をはじめ、山北町役場の方々と意見交換をしました。「外部の若者や大学生が関わるからこそ、当たり前になっている魅力に気がつくことができ、地域に住んでいる方々にとっても自分の町を知るきっかけになる」というお話があり、私たちが岩手県で目指している地域づくりとの共通点を感じることができました。午後は再度『NPO 法人共和のもり』で最近移住された方とお話をすることができ、2日間の滞在を終えました。

2日間、色々なお話を伺うことで、地域の魅力や課題を知ることができました。私自身神奈川県出身ですが、自然の資源を活かせる可能性があること、都会の喧騒を離れ落ち着くことのできる空間があることに驚きました。普段は岩手県にいますが、山北町とも引き続き交流できればと思っています。

# 子どもの居場所「ホッとサロンすくすく」に参加して

事務局次長 横山満里奈

1月23日(日)に開催された「ホッとサロンすくすく」に、事務局スタッフの高橋さんと参加しました。

「すくすく」の代表は加々美マリ子さんで、活動拠点は横浜市金沢文庫駅周辺です。設立の趣旨として、地域の様々な事情で困難を抱えたすべての子ども達が平等に生きられるよう見守り育てていきたい、と話しています。

子どもの居場所作りとして、毎月第1日曜日に「子ども食堂」を開催してきました(感染症蔓延防止のため現在は不定期開催です)。さらに、ひとり親家庭への食料支援として、毎月第3日曜日に「ホッとサロン」を開催し、以前は会場での飲食やイベントも行っていました(現在は会場での飲食を中止し、会場の滞在時間も制限しています)。

私たちは会場設営から参加させて頂き、沢山の食料を地下駐車場から2階会場まで運びあげました。スタッフは沢山いますが、それぞれが役割をこなしていきます。食料は袋詰めしやすいよう、重いモノ(主食や飲料)を列の最初に配置します。既製品は手に取りやすいよう、商品名を前にして配置します。私は5kgの米袋からジップロックに3kgずつ袋詰めする作業等を行いました。



## 多くの人が寄せる食料で支えられている

この日は3部入れ替え制で、各部で10家族前後が来場されました。多くの家族は子ども達と一緒に来ており、子ども達は元気が有り余っていました。子どもにとっては会場の若いスタッフと遊ぶことが楽しみで、大人にとっても馴染みのスタッフとコミュニケーションの場になっており、終始和やかな雰囲気でした。

食料はフードバンク(通常販売が困難な食材等をNPO等が食品メーカーから引き取って無償提供する)、フードドライブ(家庭で余っている食料を取りまとめ、地域やフードバンク等に寄付する)だけではなく、沢山の個人や企業からも寄せられています。本当に様々な方から応援されている活動だと感じました。

その一方で、運営を続けていくための後方支援の大変さも感じました。支援したいという気持ちはもちろん必要ですが、その支援をうまく現場に繋げていく過程が無いと成り立ちません。開催するにあたって、食料を集めて運搬する人、保管する場所、管理する人が必要で、数多くのプロセスが必要です。今はコロナ禍のため、出来る活動が制限されています。いずれは、こらっせが今まで行ってきた自然体験や遊びや学び等の活動と一緒にできればと思っています。新しいライフスタイルの中で、私たちは今後どのような支援が出来るのかを考えているところです。

# 保養と小児甲状腺ガンをテーマに省庁交渉

事務局長 遠野はるひ

昨年の12月20日、神奈川県の保養グループネットワーク「いのち神奈川」は、衆議院第一議員会館で省庁交渉を行いました。省庁からは、文科省1人、環境省4人、復興庁1人の総勢6人の参加。「いのち神奈川」のメンバーは「こらっせ」を含む5団体9人と山崎誠衆議院議員と秘書の石井さん、阿部知子議員秘書の政野さんの12人でした。2020年はコロナ禍により要請文を提出しただけだったので、対面の交渉は2年ぶりです。

2013年から実施している私たちの要請は、「ふくしまっ子自然体験・交流活動支援事業」（「ふくしまっ子事業」）と小児甲状腺ガンの2つテーマにフォーカスしています。3.11以後、福島の子どもたちが県内で自然・交流体験をする「ふくしまっ子事業」が実施されてきましたが、文科省は新たに2014年度から県外での保養活動にも補助金を出すことになりました。ところがこの制度を民間団体が利用するには、①県外での実施は6泊7日以上、②申請の当事者は、福島県内の社会教育団体という高いハードルがありました。

「ふくしまっ子事業」は、2019年度から期間が6泊7日から4泊5日になったものの福島県内の社会教育団体による申請という条件は変わらないので、依然として県外の保養団体には使いづらく、2020年度、2021年度（2020年12月まで）はコロナ禍により申請する団体はありませんでした。申請がなかったことを理由に補助金を打ち切る可能性について確認したところ、文科省側は「（打ち切りは）ありません」と断言しましたが、モニターしていくことが必要でしょう。

## 被曝で多発する小児甲状腺ガン

2つ目のテーマ、小児甲状腺ガンを取り上げる背景には、2016年に小中学校で行われている甲状腺ガン検査の縮小が浮上し、その後も過剰診断で潜在ガンを見つけているだけと主張する流れがあります。小児甲状腺ガンについての質問・要望には、環境省の環境保健部放射線健康管理担当参事官室の女性スタッフが回答していました。環境省の放射線被ばくに関するスタンスは、2021年3月のUNSCARE（国連科学委員会）の報告に依拠しているようです。原発問題に詳しい山崎議員は環境省のスタンスには疑問があると、担当者からさらなる聞き取りをされるそうです。



小児甲状腺ガンと診断された患者数は300人近くになります。多発している小児甲状腺ガン患者の原因は原発事故による被曝しか考えられませんが、本人も家族も声をあげることができませんでした。しかし、今年1月、事故当時6歳から16歳の男女6人の若者が、損害賠償を求め東京電力を訴えました。この若い力に励まされているのは私だけではないでしょう。